

「わたし待つわ」 使徒言行録 1 : 1 ~ 8

## I 導入部

おはようございます。5月の第一日曜日を迎えました。ゴールデンウィークの休みも今日で終わりになります。いろいろな所においてになって、いろいろな経験やいろいろな方々との交わりをされた方々もおられるでしょう。どこにも行かずにご家庭で過ごされた方々もおられるでしょう。いずれにしても、私たちは、ゴールデンウィークの最後の休みの日、日曜日にイエス様の体である教会に共に集い、共に礼拝することでひとつとされていること、礼拝を持ってこの休みを終えることができますことを感謝したいと思います。

今日は、「わたし待つわ」という題で、使徒言行録1章3節から8節を通して、お話し致します。

「待つ」ということは、私たち全ての者が日常の生活で経験していることです。私たちは、職場や学校に行く時にバスや電車を待ちます。買い物でレジの前で待ちます。高速道路で、料金支払いのため待ちます。ゴールデンウィークでは、どこに行っても待たされた。一番経験したのが待つことだった、と感じておられる方がおられるかも知れません。待つということは、私たちが毎日の生活の中で経験していることです。

毎日の経験の中で待つということと、少し違って特別な事柄のために待つということを経験することがあります。妊娠している女性は、赤ちゃんを産むためには約十か月が必要です。私は十か月も待てない、と言っても二か月や三か月では産めないのです。十か月待つのです。また、病気などで手術した経験のある方々は、体を以前のように動かすためには、回復するために待つ必要があります。ですから、待つことなしにはあり得ないのです。

イエス様は、弟子たちに待つということを命じられました。そのことを共に見てまいりましょう。

## II 本論部

### 一、今置かれた場所があなたの居場所

イエス様が十字架にかかって死に、三日目によみがえられて弟子たちを驚かせました。イエス様は、何度かご自分が十字架で死んで三日目によみがえられることを話していたにも関わらず、弟子たちにはそのことには関心がなかったのです。ペトロはイエス様を三度知らないとイエス様との関係を否定して完全にノックアウトされました。しかし、イエス様はペトロの信仰を回復し、新しい使命を与え、他の弟子たちにも励ましを与えられました。イエス様が死んだ時、弟子たちの将来は終わったと思われた。イエス様について来たことを後悔したのかも知れない。イエス様に人生をかけ、イスラエルの復興の期待もイエス様の死で夢と消えたのです。しかし、イエス様の復活で弟子たちの将来に光が差し、希

望が与えられました。イエス様は復活されてから40日にわたり神の国について話されたので、弟子たちはますます期待が膨らみ、イスラエル復興のために自分をささげたい、イスラエル復興のために働きたいと思われ、はやる気持ちを抑えられなかったのです。

イエス様は、食事の席で語られました。4節、5節のカッコの言葉です。「エルサレムを離れず、前にわたしから聞いた、父の約束されたものを待ちなさい。ヨハネは水で洗礼を授けたが、あなたがたは間もなく聖霊による洗礼を授けられるからである。」イエス様は弟子たちに。エルサレムから離れない事、父の約束された聖霊を待つことを命じ、聖霊による洗礼を授けられることを話されたのです。

エルサレムとは、田舎者の弟子たちにとっては都会です。イスラエルの中心的な場所です。田舎者にとっては住みにくい場所であったでしょう。ペトロはあなたの言葉でガリラヤの者であることがわかる、と言われました・言葉にもなまりがあったのでしょうか。弟子たちは、できるなら自分たちの故郷ガリラヤに帰りたかったことでしょうか。

NHKの朝の連続小説の「半分、青い」というドラマは田舎者のすずめという主人公が東京に出て漫画家になるというお話のようですが、いよいよ今週から東京での生活が始まるようです。そこには、大都会東京に慣れていない主人公の苦労が描かれることでしょうか。

弟子たちにとって、エルサレムは都会で住みにくいという理由よりも、エルサレムは自分たちの弱さや失敗の目立った場所でした。ペトロにとっては、大きな失敗のゆえに、そこにはおりたくない、できるだけ離れた場所であったでしょう。勿論、イエス様が十字架刑にされた場所、不吉な場所であり、いやな思いのする場所でした。そのエルサレムを離れるな、とイエス様は言われたのです。そして、待つ理由は、父の約束されたもの、聖霊を待つということです。なぜなら、待つことで聖霊による洗礼（バプテスマ）を授けられるということです。弟子たちは、自分たちにとって。エルサレムは居心地の悪い場所ですが、イエス様の言葉に従うのです。

私たちも、居心地の良い場所ではなく、居心地の悪い場所、いたくない場所、避けたい場所にとどまれ、といわれると困ってしまいます。けれども、イエス様は私たちを困らせるためでも、いじめるためでもなく、その場所で神様の力が働く、聖霊の豊かな導きを通して、驚くべきみ業をなさろうとしておられるのです。今、あなたの立たされている場所はどのような場所でしょうか。

## 二、神の時（神のみ業）を信じて待つ

弟子たちは、イエス様の復活で勢いづき、40日に渡るイエス様の言葉と復活の確証、神の国についてのお話を聞いて、さらなる勢いで、イエス様に尋ねるのです。共に読みましょう。6節のカッコです。「さて、使徒たちは集まって、「主よ、イスラエルのために国を建て直してくださるのは、この時ですか」と尋ねた。」リビングバイブルには、「弟子たちはわくわくしながら、」とあります。弟子たちの期待感がわかります。弟子たちにとって、神の国とはイスラエルの国を建て直すこと、イスラエルの復興でした。そして、イエス様の右大臣、左大臣といった役職につくことでした。その弟子たちの質問にイエス様は答えられました。7節を共に読みましょう。「イエスは言われた。「父が御自分の権威をもって

お定めになった時や時期は、あなたがたの知るところではない。」 6節と7節には、「時と時期」という言葉があります。ギリシャ語の時には2種類あると言われています。一つは、クロノスという言葉で、「時計の針が一秒ごとに同じ速さで進んでいくような連続した時間」詳訳聖書では、「時がもたらすもの（時の中に起こる諸事件）」と訳しています。もう一つは、カイロスという言葉で、「神の時、神様の力が人間の世界に介入してくる時、決定的な時間」、詳訳聖書では、「その明確な期間、すなわち、確定した年や季節、その決定的な時刻」と訳しています。

6節の弟子たちが言った「この時ですか」の時は、クロノスであり、7節の「時と時期」の時とはクロノス、時期はカイロスとギリシャ語では記されています。イエス様は弟子たちの、イスラエルの復興はこの時ですか、という質問に、弟子たちが思い描く神の国のように連続した時間であれ、神様の介入される決定的時間であれ、知る必要はない、と言われました。それは、弟子たちの問題ではなく、父なる神様の權威によることだと言われたのです。

ペトロを初め、弟子たちは今まで、自分の思いや力でやって来ました。弟子たちが思い描く神の国は、イエス様、神様の考える神の国とでは大きな差がありました。弟子たちにとっては、イエス様の力を中心に自分たちの力でイスラエルを復興し、ローマ帝国からの解放を願っていたのです。しかし、神の国とは、人間の考えや力で作り出すものではなくて、神様の權威の問題なのです。神様の偉大な權威によって、その時も完成もなされていくのです。

このことは、聖霊のバプテスマを授けられることも同じです。人間の側の考えや頑張り、力で授けられるというのではなく、神様の權威によって、神様の宣言によって聖霊が与えられるというのです。そのために、エルサレムにとどまり待てと言われるのです。私たちは、まだまだ、信仰というものを神様の權威、神様の言葉の約束よりも自分の考えや頑張り、努力に頼っているということはないでしょうか。心に手を当てて考えてみたいのです。

### 三、十字架と復活を証しする力

8節を共に読みましょう。「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」リビングバイブルでは、「わたしの死と復活を伝える証人となるのだ。」とあります。

弟子たちにとっては、あまり居心地がよくない場所、いたくない場所から離れないで、そこで待つのは、彼らの上に聖霊が下るからです。聖霊によるバプテスマを受けるからです。そして、エルサレムだけではなく、ユダヤとサマリアの全土、地の果てに至るまでイエス様の証人となるためなのです。

「あなたがたは力を受ける」の「力」というのは、何か大きなことをするとか、奇跡を行うとか、人をびっくりさせるような力というのではなく、リビングバイブルが訳しているように、「わたしの死と復活を伝える証人となるのだ。」「イエス様の死と復活を伝える」

ことのできる力なのです。弟子たちが、確かにイエス様が十字架にかかって死んだこと、確かに、墓に葬られたこと、確かに三日目によみがえられたことを伝えるために力があたえられるのです。

イエス様は私たちの罪を赦すために十字架にかかって死んで下さいました。そのことによって、私たちの罪が赦されたのです。そして、イエス様が復活されたことにより、人間の最も恐れている死に勝利し、永遠の命が与えられるという驚くべき恵みが与えられた。そのこと目の目撃の証人、それが弟子たちでした。ペトロは自分の力に過信して大失敗を経験しました。イエス様の愛によって立ち直りましたが、やはり、そのままではまた同じ失敗を繰り返します。だからこそ、聖霊の力が必要なのです。自分の考えや頑張り、努力でどうなるというのではなく、神の権威、神の力による聖霊の油注ぎ、バプテスマを受けずして、イエス様の十字架と復活の目撃者になれても、証人とはなれないのです。弟子たちは、イエス様の言葉に従い、エルサレムにとどまり聖霊が下ることの約束を信じて祈り待ち望み、聖霊を受けて、イエス様の十字架と復活を大胆に証しする力強い証人となったのです。私たちも弟子たちと同じように、イエス様の十字架の死と復活の証人として、約束の言葉を信じて、聖霊に満たされて十字架の死と復活を証ししたいと思うのです。

### Ⅲ 結論部

榎本保郎先生は、新約聖書一日一章の中で、「待つから聖霊が与えられるのではなく、聖霊が降るといふ約束のゆえに待つのである。」と言っておられます。

今の私たちにとって、もしかすると家族の中にいることが、学校の教室のクラスの中にいることが、働き場所にいることが居心地の悪い事、嫌な事、辛い事かも知れません。しかし、神様はそこから離れないでと言われるのかも知れない。そこで神様はあなたの信仰を養い、あなたを祈りへと導き、あなたに信仰の武装を与えて、驚くべき神様の業を行おうとしているのです。環境がどうこうではなく、神様の権威を持って、あなたに上からの力をあたえようとしておられるのです。

「置かれた場所で咲きなさい」という本の中で次のような文章があります。「置かれたところ」は、つらい立場、理不尽、不条理な仕打ち、憎しみの的である時もあることでしょう。信じていた人の裏切りも、その一つです。人によっては、置かれたところがベッドの上ということもあり、歳を取って周囲から役立たずと思われ、片隅に追いやられることさえあるかもしれません。そんな日にも咲く心を持ち続けましょう。・・・どうしても咲けない時もあります。雨風が強い時、日照り続きで咲けない日、そんな時には無理に咲かなくてもいい。その代わりに、根を下へ下へと降ろして、根を張るのです。次に咲く花が、より大きく、美しいものになるために。」今週、私たちは置かれた場所で、困難な場所で、そこにとどまり、イエス様のみ業を、聖霊の働きを見させていただきましょう。そのために、待つことを経験したいのです。私たちには、聖霊を受けるとキリストの証人となるという聖書の約束の言葉がすでにあるのです。イエス様は、その約束を破るお方ではありません。この週も信じて待ちましょう。